



白桜小だより

平成 28 年度 11 月号
中野区立白桜小学校
校長 宇賀神 佳子
平成 28 年 10 月 31 日発行

「言葉の力を伸ばす」、その先にあるもの

校長 宇賀神 佳子

後期が始まり 2 週間、10 月 19 日（水）に後期の委員会紹介集会が行われました。

3 年生以上の代表委員会の子どもをはじめ、8 つの委員会の委員長が全校の子どもの前に立ち、後期の活動内容や委員会からの願い事を発表していききました。

どの委員会の委員長も、原稿を全く見ないで、要点を押さえた簡潔な内容を、はっきりとした言葉遣いで堂々と発表できました。聞いている他の学年の子どもたちも背筋をピッと伸ばして、各委員会からの発表を聞き入っています。こうした話す方と聞く方の双方の子どもの姿に、これからの委員会活動の充実を、大いに期待することができました。

言葉は、自分の考えや伝えたいことを表すほかにも、気持ちを表したり相手との意思を通い合わせたりするのに使われます。適切な言葉で内容を表現できることはもちろんですが、言葉に表せない非言語の部分、態度や振舞いなどの部分が、相手に意思を伝えるためには大きな役割を果たします。特に、他者や目上の方とやりとりをする場面で、どのような言葉遣いを選んでいくかは、その人が生きてきた環境等の生い立ちの部分の影響も大きいとは、オードリー・ヘップバーンの映画「マイ・フェア・レディ」から学んだことです。私もどんな言葉や態度なら、自分の思いを適切に伝えられるか、本当に悩み続けています。

今私たちが注目したいのは、こうした伝えたい内容を明確にすることともに、その内容を適切に伝えられる言葉の数を増やすことです。昨今は、報道でも読書離れの影響もあり、若者のもつ語彙の数が激減しているとされています。「快哉を叫ぶ」や「忸怩たる思い」等の言葉を見出すと、心持の襞の部分までよく表したいという意味が伝わってくるようです。

白桜の子どもたちには、自分の意思や心情を相手に適切に伝えられる語彙の数を、読書活動や日常生活における様々な人々との会話の中から増やしていきたいと切実に思います。

今月 4 日に開催される中野区学校教育向上事業「Let's enjoy English! ～子どもが英語に自ら関わろうとする授業づくり～」では、10 学級の授業公開をはじめ、英語に触れ合わせる環境のあり方も提案していきます。このような取組で子どもたちに小学校の時から英語という言語に触れ合わせるのも、英語を自分の考えや意思を相手に伝える道具として活用できるようにすることを目標にしています。同時に、低学年から言葉に着目させるしかけを授業にたくさん盛り込みながら、やがては日本語のよさや特性にも気づかせる素地にしていきたいと考えます。例えば、「Blue」を日本語で表すにも、浅黄色、水色、空色、青色をはじめ、甕覗色（かめのぞきいろ）などというものもあります。これは、藍が育ちやがて生を終える最終段階に、布に染め出される色ですが、言葉の背景にある日本文化の豊かさに改めて出合える言葉だなと思います。小学校の段階で様々な言語に親しませるなかで、やがては日本の美しさー四季のある素晴らしさー、文化、伝統にも、子どもたちの興味や関心が広がっていくことを、私は切望しています。

当日は、地域の方々や保護者の方々のご来校をお待ち申し上げています。ご理解、ご参観のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。